
すまいる

仲村 歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
すまいる

【Nコード】
N8106Y

【作者名】
仲村 歩

【あらすじ】
啓太は負の感情と共に笑顔を失った。
そんな啓太が街で見た物は
『あなたの不幸をください。私の幸せを上げます』
そんなカードを両手で持っていた天使の見習いだった。
10000hit記念・クリスマスラヴファンタジー

天使の見習い

また、気忙しい季節がやってきた。

街中はクリスマス一色に染まり。1年で一番輝いている。

「あと2日か」

空を見上げるとビルの間に見つ黒にしか見えない小さな夜空が見える。

こんな街中では晴れていても星なんて見える方が珍しい。

朝の天気予報は雨が雪になるかもと言っていた。

まだ、降りだしては無いが厚い鉛色の雲に覆われているに違いない。大通りに目をやると忙しくなく車が行き交い、カップルや忘年会帰りの酔ったサラリーマンたちが歩いている。

「今年はホワイトクリスマスかなあ」

「そうだと良いね」

すれ違ったカップルからそんな会話が流れてくる。

ショーウィンドウに目をやると酔っぱらったサラリーマンらしき背

広姿の男が2人、小柄な女の子に絡んでいた。

ナンパでもしているのかこの街じゃ日常茶飯の事でふだんなら俺も気にも留めなかった。

「ねえねえ、良い事をしてくれるの？」

「えっと、ほわっと幸せになれますよ」

その女の子は茶髪と言いか不思議な髪の毛の色をしている。

首元にフワフワの襟が付いた真っ白い服でこの時期に良く見かけるミニスカサント白バージョンみたいな格好をしている。

そして手には大きめのカードの様な物を持っていて不思議な言葉が書いてあった。

『あなたの不幸をください。私が幸せを差し上げます』

新手の新興宗教かはたまた電波な女の子なのか。

そんな事よりも俺が気になったのは彼女がとても儚げに見えた。

存在が薄いと言えば良いのだろうか。

「バカじゃねえの」

気付くとそう言っただけで背広姿の男を蹴り倒していた。

「何だ？ おまえ……」

尻餅を付いた男を腰に手を当てて見下ろすと語尾が尻すばみになり2人連れ添って逃げて行った。

彼女を見て俺は目が覚めた気がする。

こんな状況でも彼女は笑っていた。

笑うと言っただけでいた。

それは作り笑顔ではなくまるで地のままの様な気がした。

「こんな所でそんな事をしてるとまた絡まれるぞ。家に帰りな」
これ以上係わりをもつのが嫌で自宅のマンションに向い歩き出した。

大通りから脇道に入ると途端に街灯が少なくなり薄暗い道が続いている。

その先に俺が住んでいるマンションがあった。

しばらく歩き振り返ると後ろから付いて来ていた彼女も立ち止まった。

「何か用なのか？」

俺の問いに対して彼女は不思議そうな顔をして首を傾げた。

「家に帰れと言ったはずだ」

「帰る場所はありません。私は天使の見習いですから」

電波系少女と言う奴なのだろうか、厄介なのに捕まった気がする。

「で、その天使の見習いが俺に何の用なんだ？」

「あなたの不幸を私に下さい」

「俺は不幸じゃねえよ」

「それじゃ何故あなたの瞳はそんなに哀しい色をしているんですか」
彼女の言葉に返す事が出来なかった。

「俺の目は日本人には珍しい碧眼だからそう感じるんだろう。それに俺の瞳なんか濁りきってるよ」

「違います。何処までも澄んだ哀しみの色で満ちています」

「そんな事は君に関係ないだろ。付き纏わないでくれ」

「嫌です！」

今、はつきりと拒絶された？

それでも不思議な事に彼女に怖さは微塵も感じられなかった。

「天使の見習いですから」

今、心を読まれた？

そんな筈はない僥げで普通じゃないけど普通の女の子にしか見えな
い。

「私、あなたに決めちゃいましたからあなたになら見せちゃいます」

そう言つて俺に向かつて両手を広げて飛ぶ様にして向かつてきた。

目の前であり得ない事が起きている彼女と俺は5メートル近く離れ
ていたはずだ。

段々近づいてきた彼女が俺の腰に抱き着くように腕を回すと軽いシ
ョックを受けて温かい物に包まれたような感覚がした。

天使と言つたよな。

頭の上に光の輪があつて背中に白い羽が生えているあれの事なのか？

でも、目の前に居るのはちよつと電波な女の子で。

それに天使なんてこの世に……確かに飛んで……

「今、飛んだのか？」

「はい、こんな事も出来ますよ」

俺から少し離れた彼女が体を回転させると来ている洋服が瞬時に赤
と白のミニスカサントアに変わった。

「この服はこの時期限定なんです」

「で、もう一度だけ聞くけどその天使の見習いが俺に何の用事なん
だ」

「それは、クチュン」

可愛らしいクシャミの音が聞こえて女の子が小さな鼻に指を当てて
鼻を嚙っている。

大きなため息を付いて彼女に声を掛けた。

「どうあっても付いて来るんだな」

「はい」

「それじゃ、付いて来ればいい」

「はい！」

振り返りゆつくりと歩き出す。

俺の目の前でイリユージョンの様な事を平気で見せた彼女の事だ、俺が逃げ回っても何処までも付いて来るのだろう。

それに見失ったとしても目の前に現れる想像が容易にできる。

それなら温かい部屋で話を聞く方が建設的だし、電波系と言えども女の子に風邪をひかせるわけにはいかないと思ってしまった。

家に入りリビングのソファーに彼女を座らせて何か温かい物をおい寝起きに飲んでいる牛乳に砂糖を加えてホットミルクを作る。

その横でお湯を沸かしてインスタントのコーヒーを淹れた。

マグカップに入ったホットミルクを彼女の前に置くと彼女が両手で持って口に運んでいる。

「温かい」

「今日は冷えるからね」

俺もコーヒーを口にする。砂糖を入れると眠気を誘うのでブラックだ。

マグカップをテーブルに置いて話を切り出す。

「それじゃ話を聞かせてもらおうか」

「はい。私達天使の見習いは困っている人や苦しんでいる人を助ける事で天使になれるんです」

「つまり不幸な人を助ける事って事かな」

「はい、その為に私達は力を差し上げるんです」

「その君達の力って何なの？」

「それは私達の存在の力です」

「存在の力ってそれが無くなれば君達は存在できなくなるんじゃない」

「そうですね消えてしまいます。でもそうする事で天使に昇格する

事が出来るんです」

だからあの言葉だったのか。

『あなたの不幸をください。私が幸せを差し上げます』
にしても彼女達が天使ではなく見習いなら天使って何なんだ。
疑問に思った事を正直に彼女に聞いてみた。

「それじゃ聞くけど天使って何？」

「えっと光の存在です。ですから普通は目にする事が出来ません。
人の言う所の奇跡なんて呼ばれている事が天使の仕業です。あつても光の存在がとて大きいと時に具現化される時があります」

具現化と言われてもピンとこない。

何故なら天使なんて存在は宗教画や二次創作物なんかには出でてこないからだ。

それに実際に見た人なんて皆無に違いない。

でもそんな天使の見習いが俺の目の前で美味しそうにホットミルクを飲んでいる。

「あのさ、何で俺なの？」

「えっと顔に不幸が現れています」

「……」

マジで殴りたくなってきた。

「あのう、すいません。お腹が空いて」

「はぁ？ 天使もお腹が空くの？」

「はい、実体を保つのに凄く力を使うんです。ですから実体の時は普通にお腹が空きます。それに昨日から何も食べてなくて。それに天使じゃなくて見習いです」

怒る気も失せてきた。

儂げに見えたのは実体を保つ力が落ちて来ていたからなのだろう。
仕方なくキッチンに置いてあったバイト先でもらったクッキーや焼き菓子を彼女の前に置くとおいしそうに頬張り始めた。

「美味しいです」

「話を続けていいかな」

「はい」

「見習いの上が天使で天使の上に全知全能の神様がいるんだね」

「ん」と、神様とは少し違います。主様が知らない事は無いですけど全知全能じゃないですよ。でも命を生み出す事が出来るのは主様だけです」

「へえ、そうなんだ」

神なんてこの世に存在しないと思っっている俺でも妙に納得してしまう回答だった。

「で、俺は何をすれば良いのかな？」

「あなたの望みを教えてください」

「俺は今の生活に十分満足しているしこれ以上の望みなんて」

「でも、幸せそうには見えません。それに」

今まで即答していた彼女が急に口を濁した。

「それに、どうしたの？ 俺には言えない事？」

「いえ、昇格試験の期日があと2日なんです。だから何としても天使になりたいくて」

「ゴメン、俺は力になれそうにないや」

「それじゃ、私に恋を教えてください。恋をすれば天使になれるって」

「恋って恋愛の恋？」

「はい、恋です」

それこそ俺には無縁の物だった。

齡19にして年齢の数が彼女にない歴そのまんまである。

「そんな恋なんて俺には教えられないよ」

「そうですか」

彼女が肩を落とし意気消沈している。

「どうして恋なの？」

「天使の昇格試験は難関なんです。合格できる人が殆ど居なくて。

それでも試験に落ちても天使になった先輩方が沢山いるんです。だから」

「大変なんだね天使の見習いも。自分の命を削って他人を幸せにするか恋を知るかなんだ」

「はい」

2日が経てば大人しく空の世界にでも帰るのだろう。

今すぐに寒空の下に放り出しても結局は付き纏われるのだろう。

それならば全く役に立たない俺に出来るのは彼女を放り出すのではなくこの家に置いておく事かなと安直に思ってしまった。

「俺は君に何も教える事は出来ないけれど君がよければ試験の期日までここに居れば良い」

「本当ですか？」

「構わないさ、無駄にデカイ家だしね。使っていない部屋は沢山あるからね」

「あの私からも質問して良いですか」

「良いよ」

「お1人なんですか？」

「1人暮らしの男が女の子を連れ込むのは非常識だよね」

「いえ、そうではなくお1人なのに大きな家に？」

彼女の質問に少し戸惑ってしまう。

それでも彼女が2日とは言えここで暮らすと言つのなら話しておいた方が良いでしょう。

「まあいいや。君がここに居ると言う事は直ぐに判ってしまう事だから説明しておくよ」

「はい、宜しくお願いします」

彼女が真っ直ぐに俺の顔を見て軽く握った拳を膝に置いた。

「このマンションは元々俺の親父が購入して家族で暮らすはずだったんだ。俺の学校の事情でとりあえず俺が1人で先にこの家に来ていた。その数日後には荷物が届き親父やお袋それに姉貴に妹が来る筈だった。でも荷物は届いたけれど俺の家族は来なかった」

「どうしてですか？」

「親父が運転する車に乗ってここに向かう途中で事故に遭ったんだ。

トンネルの中でタンクローリーに追突され車は大破。そしてガソリンと軽油を満載していたタンクローリーは爆発炎上した。俺が家族と再会した時には親父もお袋も姉貴も妹も小さな木箱に入れられていたよ」

「お辛かったですでしょう」

彼女の言葉に対し『清々したよ』とか『全然』などと捻くれるでもなく強がるでもなく心の内を素直に口にした。

「どうなんだろうね」

それが口から出た言葉だった。

マンションのローンも親父が入っていた保険で補い。

家族が入っていた生命保険で無理をしなければ一生暮らせるほどのお金が入ってきた。

それらは全て家族と引き換えに得た物だけどそれがどうなのかは俺には分からない。

それ以上彼女は何も聞いてこなかった。

夜も遅くなったので彼女が使えるような部屋に案内する。

その部屋は姉貴と妹が使うために用意された部屋だった。

ベッドが置かれ大きめのクローゼットが備え付けられている。

部屋の片隅には段ボール箱が積んであり箱には何が入っているか記されている。

それを見ながら洋服などが入っている段ボールを数箱あけた。

「この中の服はサイズが合えば着ていいから。まあ君が気にしなければだけど」

「お姉さまと妹さんの服ですね」

「うん。姉貴と妹は歳が離れているけれど背格好が同じだったから似たようなサイズだと思う」

「それでは遠慮なく使わせて頂きます」

「それと風呂なんかも適当に使って欲しい、タオルなんかは風呂場にあるから」

「はい、ありがとうございます」

「あんまり遠慮しないでくれる。その方が俺も気が楽だから」

「はい、おやすみなさい」

「おやすみ」

お休みなんて言葉を交わしたのはいつ以来だろう。

覚えてない程昔ではない筈だ。

自分の部屋に行きベッドに横になると直ぐに眠りに落ちた。

S a n d a n d B a k e d

翌朝、目覚ましではなくキッチンから聞こえる物音で目が覚めた。キッチンに行くのとAラインのモコっとしたグレーのワンピース姿の女の子が料理をしていて俺に気付き振り返った。

「あつ、あの。おはようございます」

「俺の名前は啓太だよ」

「啓太さん、勝手に使わせて頂いてます」

「構わないけれど何もないでしょ」

「任せてください」

俺の朝飯と呼べるものは牛乳と食パンにジャムを塗ったものくらいだ。

冷蔵庫にも食材と呼べるようなものは殆ど入っていないはずだ。

でも、テーブルに並んだ物はちゃんとした朝ご飯だった。

トーストにカフェオーレ、それに冷凍ホウレンソウ入りの卵焼きに小腹がすいた時に俺が良く食べる魚肉ソーセージが炒められて添えてあった。

「凄いな、久しぶりにまともな朝ご飯を見たよ」

「私、料理だけは得意なんです」

「そうだ君の名前を教えて欲しいのだけど」

「名前ですか？」

「うん、呼ぶ時に困るだろ」

何故か俺の質問に彼女が首を傾げている。

そして俺を見て教えてくれた。

「えつと、S I 4 0 N - 7 9 7 4 1 5 4です」

「それが君の名前なの？」

「すいません。私達見習いには認識番号しか無いんです。天使になって初めて名前をもらえるんです」

「それじゃなんて呼べばいいの？」

「S I 4 0 N - 7 9 7 4 1 5 4 と」

「S I 4 0 N って物じゃないんだから」

認識番号で呼んでくれと言われても困ってしまう。

俺の世界で人を番号で呼ぶなんて、知る限り塀の中ぐらいなものだろ。

「シフォンじゃ嫌かな」

「シフォンですか？」

それはS I 4 0 N の語呂合わせで、俺のバイト先で扱っている商品の名前の一つだった。

昔読んだ漫画で370（みなわ）や337（ななみ）なんて言う語呂合わせのアンドロイドが出てくる漫画を読んだ覚えがある。

「あの、啓太さんが呼んでみてください」

「俺が君の名前を？」

「はい」

「シフォン」

「は、はい。何だか名前つくすぐつたいです」

彼女が顔を赤らめて嬉しがつているのが良く判る。すると彼女が俺の顔を見て目を伏せた。

「ゴメンね」

「えっ、あの、何で啓太さんが謝るんですか？」

「俺、無愛想で怖そうな顔をしているだろ」

それは俺を見た殆どの人が感じる事だと経験から知っている。

中には怖がつて彼女のように目を逸らして逃げていく人だっていた。

「そんな事は無いです。それにそれなら私と一緒にです。不幸をくださいと言う私の事を気味悪がつたり変な目をして逃げていたりする人が沢山います。でもそんな私を啓太さんは受け入れてくれました。だから啓太さんが優しい人だつて知っています」

彼女が笑顔でそう言ってくれた。

そんな彼女を見ていると胸の奥がチリチリする。

それは言葉では表しようがない感じで。

俺にも普通に接してくれる友達が多くはないがいる。

そんな友達のあいつ等からは感じた事のない感覚だった。

時計を確認すると深く考えている時間はなさそうだった。

「俺、バイトに行かないといけないから留守番を頼めるかな」

「バイト？ お留守番ですか？」

「一応、俺は大学生なんだけど小遣い稼ぎに仕事をしているんだ。

今は冬休みで大学が休みだから早い時間から仕事に行っているんだ」

大学の冬休みなんて高が知れているしバイトをしなくても学費を納

めても楽に暮らしていける。

そんな俺がバイトをする理由はただ一つ。

暇を持て余してしまうからと余計な事を考えなくて済むからだだった。

「お仕事ですか。啓太さんの仕事場を見たいです」

「でも、仕事中は相手出来ないよ」

「はい、構いません。私は適当に時間を潰します。駄目ですか？」

試験の期日まで残り2日なのに適当に時間を潰すって、でも俺と一

緒に居られないのなら彼女にとっては同じように無駄な事なのだろ

う。

それを無下に駄目だと断る理由は存在しなかった。

「それじゃ外は寒いから上着を持ってきて」

「はい」

素直で可愛くて凄く良い子だと思う。

でも俺の心は反応すらしなかった。

彼女が部屋に戻り襟がベージュのファーになっている茶色いコート

を着てきた。

下に着ているワンピースはグレーで落ち着いた雰囲気になっている。

コートは大人っぽい姉貴の物でワンピースは可愛い物が好きな

妹の物だった。

2人の物を合わせるとこんな風になるのかと感心してしまう。

「それじゃ行こうか」

「宜しくです」
姉貴と妹が珍しく共同で買ったスエードのロングブーツを箱から取り出した。
ダークブラウンで履き口に折り返しがあり可愛いボンボンが二つ付いていた。
歩いてバイト先まで向かう。

この辺りは学園都市として再開発され多くの高校や大学が集められている。

その為か駅前にはカジュアルな飲食店からファッショナブルなお店が立ち並んでいる。

大通りに出るとその先に大きな駅が僅かに見える。

「そっだシフォン」

「何ですか？」

小柄なシフォンが背の高い俺の顔を見上げた。

「大丈夫だと思っけれど俺以外には天使の話をしたり力を使ったりするのは無しにしてくれないかな」

「判りました。でも力って言っても願を叶える事と少しだけ飛ぶことが出来るくらいですから」

「そっか。じゃなるべく飛ばないようにね」

「はい」

シフォンが楽しそうに腕を後ろに回して俺の横を歩いている。

俺の鉄の鎧が浸食されてきている事なんて気付く術もなかった。

しばらくすると『Sand and Baked』と言う看板が出ている俺のバイト先が見えてきた。

バイト先はサンドイッチと焼き菓子がメインのカフェになっている。もちろんテイクアウトも可能だ。

無愛想な俺が接客なんて出来るはずもなくキッチンで働かせてもらっている。

中々バイトが見つけれなかった時に半ばあきらめ気味で面接を受けて、ここの店長は俺の事情も判った上で雇ってくれたとても良い人だ。

「それじゃ仕事をしてくるから」

「はい、判りました」

中抜けの様な長めの休憩時間と仕事が終わる時間をシフォンに告げて俺は店の裏口に向かった。

着替えを済ませてタイムカードを押す。

この店の制服は黒で統一されている。

今の時期は黒の開襟シャツにキッチン黒いズボンで黒いエプロン。ホールの女の子は黒いスカートにシヨートタイプのこげ茶色のカフェエプロンをしている。

夏場は開襟シャツがポロシャツに変わる。

「おはようございます」

「おい、マイル。あの子ってマイルの彼女か？」

「違いますよ。事情があつて明日まで俺が預かる事になった女の子です」

「まあ、マイルなら間違いなんて事ないからな。でも凄く可愛い子だな」

「そうですね」

「相変わらずだな、お前は」

キッチンに入ると店長が駆け寄ってきてシフォンの事をいきなり聞かれてしまう。

この店は通り側が大きなガラス張りになっていてキッチンもオープンスタイルになっている。

それ故に通りから焼き菓子をオープンから取り出すのが見えたりサンドイッチを作る作業が見れたりする。

そして客席も通りから見える造りになっている。

因みにマイルは俺のニックネームだ。

俺の仕事は基本店長の補佐で焼き菓子を焼いたりサンドイッチを作

ったりする。
臨機応変にと店長が教えてくれたとおり何でもする。
結構な人気店でそれなりに忙しい。

波が一段落して時計に目をやると休憩までにはまだ一時間ちょっとの時間だった。

「おい、マイル。今日はもう休憩に行け」

「えっ、まだいつもの時間まで一時間くらいありますよ」

「良いから、ほれ」

店長がガラスの外の通りに目をやっている。

俺が通りを見るとシフォンが店の前でガードパイプに腰掛けて微笑んでいる。

すると2人組の男がシフォンに近づいていき何か話しかけている。

お決まりのナンパイイベントだろうと容易に想像がつく。

何処かの大学生だろう。

ナンパされていると言うのにシフォンは常に笑顔で対応している。

「少し前からずっとあの状態の繰り返しだ。見ている俺の方が冷やするぞ」

「あいつなら大丈夫ですよ」

「どうしたらそんなにクールになれるんだ。良いから俺の言う事を聞いて休憩に行って来い」

「はい、判りました」

店長に尻を叩かれてバックヤードのロッカー室に入り黒いダウンコートを着て裏口から大通りに出ると2人組がまだシフォンに食い下がっていた。

「シフォン！」

「啓太さん、どうしたの？」

俺がシフォンの名を呼ぶと2人組が驚いた様な顔して足早に立ち去った。

明らかに俺の顔を見てギョツとしていた。

するとシフォンが駈け出して来て俺の腰の辺りに抱き着いてきた。

「どうしたんだ。時間を潰すんじゃない」

「ブラブラするのに飽きちゃいました。それでここで啓太さんを待つてようと」

「そうしたら男達が生を掛けて来た」と

「はい、あれって何ですか？」

俺が思った通りシフォンはナンパなんて事を知らなかった。

「英語で言つとピクアップかヒットオンかな」

「私はピクアップなんかされません。啓太さんが居ますから」

少し怒つたような顔でシフォンが見上げる様に俺の顔を見ながらそんな事を言う。

彼女の瞳は何処までも真つ直ぐで調子が狂つてしまふ。

通りからキツチンを見ると店長が『グツジョブ！』と親指を立てて真つ白い歯を出して笑っている。

溜息をついてシフォンの手を取り店の前から早々に離脱する。

とりあえず歩き出すと通りの向こう側から声を掛けられた。

「マイル君！ 後からね」

「うわあ、彼女？」

そんな事を言いながら2人のOLさんが手を振っている。

愛想笑いすら出来ない俺は軽く会釈して手を振って全否定しておいた。

「啓太さん、あの方は？」

「お店の常連さんだよ」

「でも、啓太さんの事をマイルって」

「ああ、それは俺のニックネームだよ」

「まるで外人さんみたいで格好良いです。それに黒髪に黒い服に青い瞳って凄く素敵です」

シフォンの言葉で自分の格好を見ると確かにカラスの様に真つ黒だった。

唯でさえ碧眼の俺は目立つので普段から地味な色合いの服しか着ない、黒のダウンコートは偶々出る時に手にしたただけだ。

長い黒髪に黒い衣装を着け青い瞳で体に傷跡のある女の子のキャラがネットで話題になっていたような気がするがそれは放置する。

「なあ、シフォン。格好良いとか素敵とか平気で言うけど恥ずかしくないか？」

「恥ずかしくは無いです嘘じゃありませんから」

「まっ、冗談半分で聞いておくよ」

「天使は決して嘘は付きません。天使の禁止条項第一条の一は『天使は人を欺いてはならぬ』ですから。まだ見習いですけど」

「それじゃ、天使の決まりごとに人を喜ばすって決まりがあるのか？」

「それは……ありません。天使の見習いは人の望みを存在の力で叶えるだけです。ただ」

「ただ？」

「私は感じたままを素直に口に出しただけです。この感じが何なのかは私には判りません」

少し寂しげに俺の顔をシフォンが見上げている。

俺には微笑んでやる事も出来ず、ただシフォンの頭の上に手を置いて撫でてやった。

「啓太さんの手って温かいです」

「他にはどんな禁止事項があるのかな？」

「第二条の叶えられる願いを断ってはならないとか、ええっと」

シフォンが気まずそうな感じで何かを考えているように見えた。

「まあ、良いや。飯でも食うか」

「はい、ご飯ですね」

天使の見習いも天使も純粹で真っ直ぐな存在なのだろう。

今の俺にはそれくらい的事しか頭に浮かんで来なかった。

学園都市は綺麗な街でおしゃれな店が多いけど学生の街なので通り

から一本裏道に入ると安い定食屋や飲み屋が点在している。

小綺麗な店に行こうかと思っただけど俺とシフォンでは目立ちすぎるし恥ずかしいのでいつもの定食屋に向かった。

「いらつしゃいませ。お2人さんこちらへどうぞ」

店員のいつものおばちゃんが直ぐにテーブルに案内してくれる。いつもより早い時間なのでそれほど混雑はしていなかった。

「メニューから食べたい物を注文して」

「はい、判りました」

シフォンが頼んだのはなす味噌炒め定食で俺は定番で一番人気の生姜焼き定食を小ライスで注文した。

お店に来る客は学生がメインなのでほとんどの店が安くて美味くてポリユーム満点をうたい文句にしている。

そんな店の中でも上位に入るのがここで男子学生でもそのポリユームから小ライスを頼む奴が結構いる。

シフォンにも小ライスを進めたが普通のだと言い切られてしまった。目の前には大盛りのキャベツの千切りに乗せられた皿から溢れんばかりの生姜焼きとなす味噌炒めがあり、俺の前には小ライス（普通の茶碗）と普通のライス（大きな茶碗）に入れられたご飯とみそ汁が湯気を立てていた。

「いただきます」

2人同時に手を合わせて箸を伸ばした。

「ん！ ふごくおいひいでふ」

「凄く美味しいのは良く判るから食いながら喋るな」

「ふあい」

凄く可愛い顔をした女の子が嬉しそうに男も負けそうな勢いでガツガツ食べている。

隣で食事をしている学生が少し驚いた様な顔をしてこちらを伺っている。

男子学生だけじゃなく女の子も良く来る店だが、シフォンの様に男勝りな食べ方をする女の子なんて先ず居ない。

まるで子どもの様にしか見えなかった。

「美味しかったです」

「ほら、ほっぺにご飯粒が付いてるぞ」

指でシフォンのほっぺに付いているご飯粒を指でとって口に放り込んだ。

「啓太さん、お手数をお掛けします」

「俺の事は呼び捨てで良いよ」

「でも」

「俺が良いって言ってるんだから良いんだよ。シフォンって俺と同じ年か一つ下位だろ」

「あの、天使には年齢はありません。でも人であれば私は180年位生きてます」

思わず飲みかけていたお茶を吹き出すところだった。

「げふお、げふお。180年？」

「はい」

周りはかなり騒々しいのでシフォンとの会話なんて聞いている奴は居ないだろう。

それでも驚いて声を上げてしまった。

「なあ、シフォン達って成長するの？」

「失礼です。啓太さん。あっ、啓太は。私達だって成長します確かに時間の流れが違うからとてもゆっくりですけど」

「ゴメンゴメン、そうだよね、最初から大人になんてなれないもん
な」

普段なら店に戻りバックヤードで昼寝をするのだがシフォンが一緒なので定食屋を出て街中を少し歩くことにする。「啓太、あれは何ですか？」

シフォンはまるで子犬の様に色々な物に興味を示し、その度に繋いでいる俺の手を引っ張って突撃していく。

一つ一つきちんとシフォンに判る様に説明していく。

デートってこういう事を言うのかな。

そんな事が頭の中を過る。

でも、彼女すら出来た事のない俺には良く判らなかつた。

シフォンに聞いてもたぶん同じ答えが返ってくるだろう。

それともう一つシフォンに啓太と呼ばれるとまた胸の奥がチリチリした。

一頻り歩き回り休憩時間が終わるので店に戻る。

「それじゃ終わりの時間にな」

「はい、判りました。今度は少し遠くまで歩いてみたいと思います」

「気を付けるよ」

「大丈夫です。一応、見習いですから」

「そうだったな」

店の前で別れてロッカー室でコートからエプロン姿になりキッチンに向かう。

店長が見当たらないので店内を見渡すと窓際の席に店の前で別れた筈のシフォンが座っていて店長と談笑している姿が目飛び込んできた。

「店長、いったい何を？」

「マイルはまた彼女を独りぼちにするつもりなのか？」

「いや、俺は仕事ですから仕方がないじゃないですか」

「そこでだ、彼女にはここでゆっくりしてもらおう事にした。それと店長権限で彼女は好きなだけ飲んだり食べたりして良い事にする」

「意味がわからないす」

「まあ、良いじゃないか。マイルも彼女がここに居た方が安心だろ」

「そうですね」

完璧に店長に押し切られてしまった。

それに店長が言おうとしている事も理解できる。

いつまたピクアップされるか判らないし、中には強引な奴もいるからだ。

するとシフォンが聞かなくても良い事を店長に聞きだした。

「店長さん。啓太は何でマイルなんですか？」

「マイル、彼女の名前は？」

「シフォンです」

「可愛い名前じゃないかハーフかな？」

「そんな感じですよ」

俺がシフォンの名前を店長に告げると店長がシフォンに笑顔で質問した。

「シフォンちゃんが一番長い英単語って何か知っているかな？」

「英単語ですか？」

「そう、英単語で」

「Pneumonoultramicroscopicsilicovolcanooconiosis」*1)ですか？」

「へえ？」

「あつこれは肺の病気の名前です」

「そうなんだ」

「因みに地名ならTaumatawhakatangihanga
koauauotamateapokaiwhenuakitan
atahu」*2)で、ニュージーランドにある高さ305mの丘
の名前です」

「……シフォンちゃんって博学なんだね」

「店長、仕事をしてください」

「マイルが仕事をしろ。俺は小休憩中でシフォンちゃんと楽しいお喋りタイムだ」

呆気にとられている店長に声を掛けると切り捨てられてしまった。

*1)ニューモノウルトラマイクロスコピックシリコヴォルケーノ
コニオシス

*2)タウマタファカタンギハンガコアウアウオタマテアポカイフェ
ヌアキタナタフ

溜息をついて仕方なく仕事を開始する。

一通りの事は教え込まれているので次の段取りはだいたい判っている。

店内はお客さんも疎らで店の奥にあるドリンクカウンターでは3人の女の子スタッフが俺と店長のやり取りを見て笑っている。

このお店のスタッフ達は俺の事情を知っているので怖がったりしない。

それでも人付き合いが苦手な俺はそこまで彼女達と打ち解けていないのが事実で忘年会や新年会を店長が開いてくれても正直戸惑ってしまう事が多い。

「シフォンちゃん、これはなぞなぞだよ」

「なぞなぞですか？」

「そう、答えはSMILESだよSとSの間が1マイルも離れているからね」

「本当だ、凄いです。そのマイルが啓太ですか？」

「うん。シフォンちゃんは啓太の家族の事は」

「啓太から聞きました」

「そうか、啓太は家族を失ってから全く笑わなくなってしまったらしいんだ。それで啓太の友達が付けた渾名と言うかニックネームが笑顔から一番遠い男マイルになったんだよ」

「そうだったんですか。私が啓太に『辛かったんだね』って訊ねると『どうなんだろう』って言ってました」

「大き過ぎる傷が全ての感情を切り取ってしまったのかもしれないね。シフォンちゃんには啓太の側にずっと居てもらいたいな」

「でも、それは無理です。約束の日は明日までですから」

「そうか、無理なお願いをしてゴメンね。好きな物を注文してくれる構わないよ。支払いは気にしなくて良いから」

「ありがとうございます」

店長がシフォンに話していた事は俺にとっては今更な事だった。

あの日に全て終わってしまったのだから。

店長がキッチンに戻ってきてしばらくすると店内が慌ただしくなってきた。

シフォンは窓際の席で自分の名と同じ名のシフォンケーキに添えられた特性生クリームを付けながら頬張りオレンジティーを優雅に飲んでいる。

いつもより数段忙しく焼き菓子を追加で焼いたりサンドイッチを急いで仕込んだりしているうちに終わりの時間が迫ってきていた。

「疲れた」

「流石、シフォンちゃんの集客率は抜群だな」

「ああ！」

気付いた時には既に遅しと言うあれだ。

何故、店長がシフォンを目立つ窓際に座らせて無料で飲み食いさせたのが判った瞬間だった。

普段は女性客が多いお店なのに今日はカップルには見えない男性客と女性客の組み合わせがやたら多かった。

窓際に座っているシフォンを見て気になった男達が女友達を誘って普段は入りづらいこの店に来ていたと言う構図なのだろう。

女友達にしても男友達に誘われれば当然の様に奢ってもらえて尚且つ人気の店に来られるのだから喜んで一緒に付いて来る筈だ。

まあ、今日一日限定の裏技の様なものだと思った。

「マイルも辞めないでくれよ。うちの看板男子なんだから」

「お疲れ様でした。お先です」

頭垂れて店を後にする。

俺が看板男子ね、まるで何々系男子とか言われているみたいだ。

確かに俺も目立つ日本人には珍しい碧眼だし背は高いし。

で、マイルなんて呼ばればまるで日本語がバリバリのちょっとシヤいなハーフにしか見えないのだろう。

これも気付いた時にはって言うやつだ。まあ、大変だけどそれなりに楽しくは感じているから良しとしよう。

笑えないけど……

夕飯を済ませ風呂に入るとシフォンも風呂から上がってきて自分でホットミルクを作って俺が居るリビングのソファアにやってきた。

「啓太、隣に座っても良いですか？」

「構わないよ」

シフォンがちよこんと俺の隣に座り両手でマグカップを持ってホットミルクを飲んでいる。

カップをテーブルに置くと俺に凭れかかってきた。

「今日は沢山歩きました」

「疲れたね。部屋で早く寝な」

「ふあい、啓太は優しい匂いがしまふう……」

「ふう……ってシフォン。自分の部屋で」

シフォンの体から力が抜けて俺の肩に頭を置いて眠りに落ちてしまったようだ。

温かくとても柔らかい物を全身で感じてしまう。

仕方なくシフォンの体を手で支えながら立ち上がり一旦シフォンの体をソファアに寝かせる。

シフォンが使っている姉貴達の部屋にあるベッドに連れて行くため起こさない様にそっとシフォンの体を抱き上げた。

すると鼻をくすぐる様な良い匂いがして胸の奥で何かがカチンと何かが嵌まる様な音がしたような気がした。

でも今はそんな事に気を取られている場合ではなくシフォンをベッドで寝かせるのが最優先事項だった。

シフォンをベッドに寝かしつけ自分の部屋に戻ると仕事の疲れからかあの音が何なのか気にする間もなく俺自身も深い眠りに落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8106y/>

すまいる

2011年11月25日23時55分発行